



カタログに見る夢と現実

2016年上半期の話題の一つに、自動車燃費のカタログ値におけるデータ不正問題がありました。この件についてのインタビューや新聞雑誌の記事で驚いたのが、カタログ燃費を信用していた人がそれなりにいた、ということ。もちろん数値の改ざんはやってはいけないことで、車を選ぶうえで燃費が判断材料の一つであることには異論はありません。カタログを飾るきらびやかなキャッチコピーや魅力的な数値は（“嘘”は問題外として）“大げさ・まぎらわしい”はあたりまえ、と思っていて私にとって印象に残るニュースでした。

研究や職務で取り扱う器具や装置類だけでなく、日常生活で電化製品の選定においてカタログを目にする機会は多いと思います。ご多分に漏れず、私も家電製品店やカーディーラーでカタログを貰いますし、持ち帰って見比べるのがかなり好きな部類です。比較サイトなどでユーザーレビューを簡単に探せるご時世ですが、ここぞというときは紙のカタログで検討するのが欠かせません。特に、腕時計やカメラのカタログは、印刷や装丁のクオリティも高いので眺めているだけでも楽しくなります。

初めて自分でカタログを集めたのは、友人の影響でオーディオに興味を持った中学生の頃でした。休みの日には友人と市内にあった電気店のオーディオフロアに向いて、高級オーディオ機器のカタログを貰ってきたものでした（買える訳もないのに）。今から思うと、丸坊主でどっからどうみても中学生の私が店内をウロウロしていても、そっとしておいてくれた店員さんの心の広さには感服します。家に持ち帰ったカタログを眺めながら、アンプはどれにしよう、スピーカーはこれにしよう、などと夢のシステムを組む計画を立てたものでした（ラジカセしか持っていないのに）。放課後には友人とお互いに架空のオーディオ・システムを披露しながら、“相性が～”とか“バランスが～”とか批評しあったものでした（視聴すらしたことはないのに）。ここで学んだことは、カタログを集めてアレコレ思いをはせるのはとにかく楽しい、ということでした。

そのままカタログを眺めるだけでは終わるわけもなく、高校入学に合わせてラジカセ生活から脱却しようと行動を起します。しかしながら、今まで貯めたお年玉と高校入学祝いをかき集めてみても、ミニコンポを買うのが精いっぱいという現実と直面します。予算に限りがあるという厳然たる事実を意識してはいますが、それでも

まだカタログに躍るタタキ文句に心を動かされます。やれ、スベアナが、グライコが、ナンとか回路で音質が、などという謳い文句につられて、とあるメーカーの上位機種を購入しました。購入当初はあらゆるスイッチやボタンをいじくり回しましたが、半年も経たないうちに電源とボリュームと再生ボタン以外には触らなくなりました。ミニコンポ生活の新鮮味が薄れたところに、カタログを改めて精査してみると、自分が必要としていた機能は最下位機種で十分だったことに気がつきました。ここで学んだことは、カタログでアピールされている機能は自分に必要かどうかよく考えよう、ということでした。

その後は、カメラやコンピュータなどの電化製品の購入を通して、カタログに躍る文句に気を取られずに読み解くようになりました。特にポスドクの頃に、それなりの台数のノートパソコンをまとめて手配したり、装置や器具の選定をさせてもらったのは良い経験でした。実際には“使い慣れている”という一点だけで購入を決めたとしても、選定理由書には他社製品よりも奥行きが1cm短いことがいかに重要なことであるかを書きつづったり。おかげさまで、カタログを手にとるとまずは巻末の仕様表を眺め、基本性能や消耗品対応状況などから確認するのがクセになりました。ここで学んだことは、カタログの隅に書かれている現実が大事、ということでした。

研究関連でもやはり器具や試薬類から文房具類のカタログにお世話になる生活です。顔なじみの業者さんが「〇〇装置がキャンペーンで×××万円です」と魅惑のカタログを持ってきてくれますが、いつかはコイツを使うかもしれないと思いつつカタログ置き場の“夢”コーナーにしまっています。“現実”コーナーの消耗品カタログを眺めながら、珍妙なネーミングの商品を見つけたり、ある器具の正式名称が自分が覚えているものと違うことに気がついたり、新たな楽しみ方も覚えました。きっとこれからもいろんなカタログに夢を見させてもらったり、現実を教えてもらったりすることでしょう。

さて、東北支部で同じ釜の飯を食ったいわき市役所の鈴木さんより受け継いだこのリレーのバトンは、中部支部でお世話になった名古屋工業大学の高田主岳先生にお渡すことにしました。高田先生にはいつも無茶振りやお願いをしてばかりなのですが、今回も快くお引き受けいただきました。

〔東邦大学理学部 森田耕太郎〕